

サケ (サケ科)

学名：*Oncorhynchus keta*

別名：シャケ, シロザケ

大きさ：体長 65 cm

特徴：海洋生活期のサケは全身が銀白色であるが、産卵に近づくと銀白色から赤や黄色、緑色のまだら模様が変わる。まだら模様になったサケは“ぶなざけ”のように呼ばれる。成熟が進んだオスの上顎は伸びて下に曲がり、かぎ状になる。

国内の分布：日本海側では九州北部以北、太平洋側では利根川以北の河川に遡上する。

県内の分布：茨城県を流れる多くの河川で遡上、産卵が行われている。霞ヶ浦・北浦でも採捕されるが、これは利根川に遡上したものが迷い込んだものと思われる。

県内での生態：茨城県の河川には、9月下旬～11月頃に産卵のために遡上する。産卵は9月下旬～12月中旬頃まで行われる。ふ化した仔魚（写真1）は冬の間は河床の石の間などで過ごす。稚魚は3月頃から浮上して遊泳生活を送るようになり、4月中旬～5月下旬にかけて海に降る（写真2）。海に降るまでは、流下してくるユスリカ類の

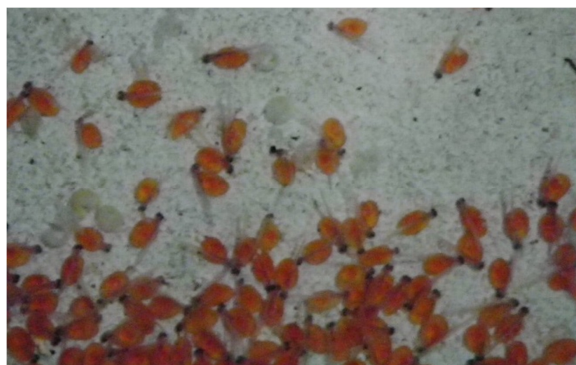


写真1：ふ化仔魚。赤い卵黄と黒い眼が目立つ。



写真2：降海中の稚魚。上流に頭を向けている。

幼虫や蛹、羽化した成虫を主に捕食している。これは、サケの口の大きさと餌生物の大きさの関係でユスリカ類が選択的に捕食されるため。

備考：サケが遡上する道県では人工的に採

卵し仔稚魚を育ててから河川に放流するという増殖事業が行われている。日本で初めて人工ふ化放流が行われたのは1877年だが、その場所は本県的那珂川である。現在の本県では鬼怒川と那珂川および久慈川の3河川で漁業協同組合による人工採卵が行われ、年間約300万尾の稚魚が各河川に放流されている。一般的にサケは産卵のために生まれた川に戻るといふ母川回帰を行うが、上記3河川への回帰率は平均約1%と推定されている。回帰するサケの年齢構成は3、4歳が中心である。近年は、県内の多くの河川でボランティア団体などが地域の幼稚園や小学校などと協力してサケ稚魚の放流を行うようになっており、県北地域の花貫川や十王川などでも、毎年多数のサケが回帰するようになった。

本県では、サケの遡上時期には群れて河川を遡上する姿や産卵床を掘る姿(写真3)、産卵床に近づく他のサケを追い払う姿などを間近で観察することができる。産卵後の死んだサケを鳥が食べている“自然の摂理”を目にすることもできる(写真4と5)。驚かせないように配慮しつつも、長旅から帰ってきた大魚を身近に感じていただきたい。

なお、河川でのサケの採捕は水産資源保護法により禁止されている。海でも河口から一定の範囲内では採捕が禁止されていることが多い。詳細は各県の漁業調整規則などを参照されたい。

主な文献：

位田俊臣(1982)茨城県内水面のサケ科魚類の分布について。茨城内水試調査研究報告, 19: 77-85.

小松伸行・大森 明・小沼洋司(1997)大北川における天然サケ稚魚の動態と資源量。茨城内水試調

査研究報告, 33: 33-42.

佐藤重勝(1986)サケをつくる漁業への挑戦。岩波書店, 東京. 213 pp.

山口安男・星野 悟・佐藤陽一(1993)大北川におけるサケ稚魚の食物環境に関する研究-I。茨城内水試調査研究報告, 29: 81-89.



写真3：産卵床を掘るサケ。鬼怒川で撮影。



写真4：産卵を終えて死亡したサケ。ほっちゃれと呼ばれる。久慈川で撮影。



写真5：死んだサケを狙うカラス(川の手前)とトビ(向こう岸)。ほっちゃれは鳥たちの命も支える。久慈川で撮影。